文学研究科　文化財学専攻

氏　　名	**古田土　俊一**
学 位 の 種 類	博士(文化財学)
学 位 記 番 号	乙第1号
学 位 の 日 付	平成29年3月14日
学位授与の要件	学位規則　第4条　第2項該当(論文博士)
学 位 論 文 題 目	**石造物から見る中世鎌倉の都市構造**
論 文 審 査 委 員	主査　教授　伊藤　正義
	副査　教授　宗臺　秀明
	副査　名誉教授　河野　眞知郎

内容の要旨及び審査結果の要旨

論文名　石造物から見る中世鎌倉の都市構造

序論　研究史の整理と本論の目的
　一、鎌倉における中世石造物の動向―研究史の整理―
　二、本論の方法

第一部　葬送・供養に関わる石造物の変遷と背景
　第一章　中世鎌倉における五輪塔の様相
　　はじめに
　一、五輪塔の基礎的情報
　二、鎌倉における五輪塔の石材と形式分類
　三、やぐら内浮彫・線刻塔の位置付け
　四、鎌倉における石造物以外の五輪塔の性格

　第二章　鎌倉最古の無縫塔―建長寺開山塔の造立背景―
　　はじめに
　一、建長寺開山塔の考古学的見地
　二、覚園寺に現存する類例
　三、日本における禅僧の墓制と「地宮」

第三章　中国仏塔の地下構造と日本の地下式坑・やぐら
はじめに
一、中国仏塔の地下構造と舎利荘厳
二、中世禅宗の墓葬事例と地下式坑の墓壙起源説
三、やぐら発生に関わる中国の影響と石窟遺構

第二部　都市とみちと石塔
第一章　中世鎌倉のみちと造塔
はじめに
一、やぐらから見る鎌倉の範囲
二、鎌倉に残る仏像とみち
三、石塔の造立と立地
四、鎌倉の境界
五、景勝地とヴィスタ

第二章　景勝地「江の島」の中世石碑
はじめに
一、石碑の形態と構造
二、石材の産地
三、本石碑における文様の検討
四、本石碑の原建立地

結論
一、墓塔の導入と鎌倉での技術者の展開
二、石造塔下遺構の起源と継承
三、都市の中での機能
四、都市鎌倉における文化発展の背景
五、今後の課題

本論文の構成

本論文は、「序論―研究史の整理と本論の目的―」、「第一部　葬送と供養に関わる石造物」の研究、「第二部　中世鎌倉のみちと造塔」の研究、「結論」の四部から構成されている。以下、各章の概略と要旨に付いて記述する。

序論・研究目的

本論文の研究目的は、十二世紀後半以降に武家の政権都市として発展した鎌倉の都市構造の形成過程において、石造物が果たした役割とその文化的・宗教的背景を、考古学の視点から明らかにすることである。

鎌倉が中世都市として発展する過程において、導入された文化の一つが石造物である。十三世紀後半

～十四世紀初頭に導入された石造物文化は、葬送・供養の墓塔として流行して鎌倉に定着した。定説では、奈良西大寺を中心とする南都律宗の関東地方への教線拡大に伴い、畿内で活躍していた渡来系石工集団の技術力の導入によって、鎌倉の石造物文化が発展したと理解されており、この時に導入されたのが硬質石材の「伊豆箱根系安山岩」の加工技術である。従来からの地元産の「三浦層群凝灰岩」の加工技術と併せて、この二種類の石材が鎌倉の石造物の大半を占めている。

南都律宗と渡来系石工集団を中世都市鎌倉の石造物文化の主導者とする定説に対して、近年は南都律宗からの単独導入説を批判する学説が提示されている。既知資料に新資料を加えて再検討することによって、石造物文化・技術の導入背景には多様な文化的・宗教的な交流があったことを証明する。

石造物研究は、美術史と建築史が先行して主導してきたために、単体資料の分析と考察、類似作例の比較研究にとどまり、都市論との関係性を問う視点は希薄だった。石造物が中世で使用された文物の一つであるならば、考古学の出土遺物と同様に、立地する場の意味や地形などと総合して考察しなければならない。都市論との関係性の研究から、石造物が都市の中で担った、墓塔・葬送以外の役割と機能を検証する。

近年は、宝筐印塔の中国起源説が提示され、九州地方では中国から輸入した石材、石塔（薩摩塔）の存在が解明されている。鎌倉幕府は、全国を統治する政権へと発展して、中国大陸の知識や文化を直接導入する実力を持っていた。石造物文化は畿内から導入されたとする、単線的な従来の研究成果は再検討が必要であり、東アジアにまで視野を広げた多角的なルーツの可能性を検討すべきである。

第一部　葬送・供養に関わる石造物の変遷と背景

第一部では、墓塔としての性格が強い五輪塔・無縫塔を中心に、葬送・供養の場で石塔がどのように用いられたのかに付いて、実態と変遷過程を再検討して宗教的な背景を分析した。

第一章　中世鎌倉における五輪塔の様相

源頼朝は、１１９７年にインドの阿育王の故事に由来する、五輪塔型の泥塔による慰霊供養の八万四千塔供養を施行した。同供養の文献史料上の終見は、１２６０年の宗尊親王将軍の段階であるが、泥塔が十三世紀後半の遺物として出土していることからすると、同供養は武家の王権の象徴として、継続的に施行されていたと推定した。

鎌倉には十三世紀後半以前から、五輪泥塔や木造五輪塔、木造五輪塔婆を用いる文化が存在していたが、石造五輪塔は新たな石造物文化として鎌倉に導入されたことを証明した。畿内系の安山岩製石造物に先行する鎌倉の在来技術として凝灰岩製石造物が存在し、それぞれ独自の変遷を辿ったが、やがて両者間には交流と影響が発生した。

安山岩製五輪塔の型式は、１３０３年造立の西大寺流律宗の極楽寺開山の忍性塔が嚆矢である。のちに爆発的に盛行する小型五輪塔は、１３０６年造立の同宗の多宝寺長老の覚賢塔が祖型であり、同塔で関東地方独自の五輪塔の型式が成立した。「やぐら」内の浮彫塔は石塔と同様の型式的変遷を辿る。作例の多くは凝灰岩製石塔の型式であるが、安山岩製石塔の初期の型式の作例もあり、やぐらの造営には凝灰岩と安山岩の両方の石工が関与していたことが指摘出来る。

瓜ヶ谷やぐら群で連綿と継続された浮彫塔は、型式分類から１５世紀中頃～後半の中世都市鎌倉の衰退とともに途絶えることを明らかにし、「やぐら」造営の下限時期を浮彫塔の型式の終末から解明した。

五輪塔造立には、奈良の南都律（西大寺流律宗）の影響が強いことは確かではあるが、京都の泉涌寺を中心とする北京律や中国渡来の臨済宗寺院の関与にも注目すべきである。

第二章　鎌倉最古の無縫塔―建長寺開山塔の造立背景―

蘭渓道隆（１２１３－７８）は、中国南宋の四川省出身の臨済宗の僧侶で、１２４６年に来朝して京都の泉涌寺や鎌倉の寿福寺などに寓居し、１２５３年に執権の北条時頼に請われて鎌倉の建長寺の開山となった。一時期、京都の建仁寺の住職となったが、建長寺に戻って１２７８年に同寺で示寂した。

東国では最も古く、全国的にも二番目に古いとされている建長寺開山塔の考古学的・型式学的な分析と文献史料から、同塔は蘭渓道隆の一周忌の１２７９年に造立されたと特定し、この時期に鎌倉で関東独自の無縫塔の型式と安山岩加工技術が確立したことを証明した。建長寺開山塔と型式的に近似する北京律宗の覚園寺の無縫塔の被葬者は、蘭渓道隆と関係が深い願行房憲静であると推定した。臨済禅と北京律の緊密な関係が浮かび上がり、関東独自の無縫塔の成立に、北京律が深く関係していたことを論証した。

禅宗寺院で発見されることが多い、蘭渓道隆の葬送にも採用された中世禅僧墓の「地下埋設遺構」は、中国仏塔の「地下遺構」と類似した構造と形状であり、「地下埋設遺構」の一部と推定される覚園寺所蔵の石櫃は、中国から伝来した葬法に伴うものであること論証した。中国仏塔の「地下遺構」と日本の地下式坑と「やぐら」が構造的に類似していることを指摘し、中国仏塔に由来するこの二つの新葬法は、蘭渓道隆をはじめとする中国四川省系の渡来僧によって、日本と鎌倉に導入されたことを論証した。

第三章　中国仏塔の地下構造と日本の地下式坑・やぐら

中国仏塔の地下遺構の「地宮」と鎌倉の禅宗寺院に伝世する出土遺物の石櫃、関東地方に分布する「地下式坑」、鎌倉を発祥地とする「やぐら」の関連性を検証した。

前章での検証から、地下式坑と「やぐら」は中国仏塔の「地下遺構」がルーツであることを再度指摘した。鎌倉の場合は谷戸の絞り水と湧水のために地下式坑は造営出来なかった。鎌倉の「やぐら」は、中国仏塔の「地下遺構」を丘陵・谷戸の崖面を横掘りして設置したものである。

中国仏塔の「地下遺構」は、仏舎利埋納施設であり、中国では高僧の遺骨は仏舎利と同一視されていた。石塔は日本でも根本理念では仏舎利奉安施設であると認識されていた。「やぐら群」の最高所や丘陵の先端部には大型石塔が設置されており、崖面を穿って造営された「やぐら」は、大型石塔の「地下遺構」に見立てられていた。鎌倉では、上位に仏舎利塔が造立されて、その下位の崖面に葬送施設兼供養堂の「やぐら」が造営されたのである。

中国仏塔の「地下遺構」は、古代から続く伝統的な王侯墓の地下室を模したもので、儒教思想にその起源を求めることが出来る。十四世紀後半に活躍した、京都五山の禅僧・義堂周信の『空華日用工夫略集』に記載の「掩土之法」は、「地下式坑」の構造と近似している。周信は儒学者の性格が強いことからすると、「掩土之法」と「地下式坑」は、儒教と臨済禅の葬法が習合した葬法である可能性がある。

日本の留学僧と中国の禅宗僧侶との濃密な交流のネットワークを通じて、多くの南宋の禅僧が日本に渡来した。その人脈の一つが、京都の泉涌寺を中心とする北京律であり、建長寺開山の蘭渓道隆も泉涌寺を介して鎌倉に招かれた。蘭渓道隆などの渡来僧たちによって、中国の四川省を中心とする「崖墓・崖葬墓」の葬法が鎌倉にもたらされたことも一因となり、鎌倉独特の「やぐら」の葬法と景観が成立した。

臨済禅では、禅・律・密・浄土の兼修・兼学が通例であり、儒教と漢文学も併せて学んだ。鎌倉では宗派を越えて寺院と僧侶は盛んに交流して相互研鑽に励んでいた。

第二部　都市とみちと石塔

第二部では、石造物の存在形態・分布論の視点から、中世都市鎌倉の形成過程と鎌倉の範囲・境界に付いて考察して、石造物と都市形成の基本インフラである街道や街路との関係性に付いて分析した。本論文の「みち」は、陸上・海上・水上交通の全てを含む概念として使用する。

第一章　中世鎌倉のみちと造塔

鎌倉初期の寺院配置と仏像の遺存例の分析の結果、初期の寺院はいずれも山上や丘陵上に立地し、その場所は街道からの目印になる「アテ山」であることを証明した。鎌倉の大型宝筐印塔の遺存例は、全て山際や崖下、または丘陵上に立地する。山際や崖下のものは、災害などで転落したものを積み直したもので、本来は山上に立地していた。

山上に立地する大型の宝筐印塔は、十三世紀中頃から後半にかけて、谷戸を切り開いて寺院を建立したことと連動していた。拡大する都市鎌倉と街道・交通路の整備に伴い、街道から眺望出来る山上に大型の宝筐印塔が造立されたのである。

宝筐印塔は、仏舎利と同じだと意識されており、遙拝する者に滅罪の功徳を及ぼし、都市のランドマークの機能も担っていた。山上の宝塔は経塚（経典の地下埋納施設）の意味を持ち、層塔は交通路の安全を祈るために辻々に配置された。

大型石塔の分布範囲は、鎌倉幕府が実施した「霊所七瀬祓い」（東・六浦＝横浜市金沢区、西・江の島＝藤沢市、南・由比ヶ浜、杜戸＝葉山町、北・鼬川＝鎌倉市大船）の範囲内に納まり、鎌倉幕府が意識していた「鎌倉世界」の範囲を大型石塔の分布範囲が示している。

第二章　景勝地「江の島」の中世石碑

鎌倉で随一の景勝地、補陀落観音と弁財天の霊場で、航海の「アテ山」でもある江の島に石塔が配置されていないのは不思議である。辺津宮付近の覆屋の中に安置されている、中国伝来と伝承される石碑の調査研究を実施した。

碑文は拓本で判読した結果「大日本国江島霊迹建寺之記」と読めた。同碑は、室町時代の作とされる『江島縁起絵巻』に記載されており、室町時代には既に存在していた。石碑の上部を飾る陰刻の双龍の文様から、同碑は中国由来の顕彰碑であり、石材は中国産である可能性を指摘した。

碑文の型式からすると、同碑は亀の台座を有する「亀趺碑」の可能性が考えられ、本来の建立場所は江の島の龍穴前であろうと推定した。

結論

石造物文化が、中世都市鎌倉の都市構造の形成過程の中で果たした役割と文化的・宗教的な背景は、以下の四点に要約される。

一．中世鎌倉の石造物文化は、臨済禅、南都律、北京律などの宗派間の幾重にも重なり合った濃密な人的・文化的な交流の中で生み出されて、発展、展開していった。中世鎌倉の石造物文化は、従来の研究では奈良西大寺流律宗（南都律）の活動を中心に論じられてきたが、本論文での研究の結果、南都律からの単線的な導入説では不十分であり、中国直輸入の臨済禅や京都の泉涌寺系の北京律が果たした役割と要素が大きかったことが証明された。

二．中世都市鎌倉は、十三世紀後半に爆発的に発達して、都市域も拡大した。北条氏によって招来された純粋禅、北京律、南都律などの新規の宗派は、谷戸の開発に合わせて、中国の四川省を中心とする

「崖墓・崖葬墓」に由来する新葬法の「やぐら」を鎌倉に導入した。中世禅僧墓の地下施設は、中国の仏塔の地下施設がルーツであり、三浦層群の凝灰岩が基盤の鎌倉周辺では「やぐら」に変容し、関東ローム層を基盤とする関東地方では「地下式坑」に受け継がれた。

三．山上や辻に造立された大型石塔は、都市における交通路のランドマーク、街道・街路整備の目印・基点の機能を担った。造立者は幕府の有力者であったと想定されるが、大型の石塔には墓塔であることを示す銘文はなく、供養や繁栄を願う願文が刻まれており、広く万人へ功徳を及ぼして、万人を救済することを願って造立されたと推定される。大型の石塔類は霊場・霊山の景勝地に立地する。霊場ではなかった場所は、造立された石塔を万民が遙拝することによって、やがて霊場化してゆく。大型石塔は、大衆へ功徳を施す、権力者の善政を示す宗教装置でもあった。

四．鎌倉の西限を護る海の霊場で景勝地の江の島には、中国式の「大日本国江島霊迹建寺之記」の寺院建立顕彰碑が造立された。石碑の石材は中国産の可能性があり、当初の建立場所は江の島の龍穴前と推定される。

〔指摘事項〕

①序章での全体の研究史の整理と問題点の設定、本論文の目的と方法論の提示が不十分である。この弱点は、各章の「はじめに」で章ごとの研究史の整理と目的・方法論を提示した論文の構成に起因する。各章の「はじめに」を序章に取り込み、本論文の全体像と課題、研究目的を一括して最初に提示した方が良い。各章の「はじめに」にでは、序論で述べた関連箇所の要約を再掲示すれば良い。

②江の島の中世遺構に関する詳細な分布図・地図が示されていない。

第二部第二章の「景勝地江の島の中世石碑」は、中国に由来する中国式の顕彰碑であり、中世鎌倉の五輪塔・宝筐印塔・宝塔などの石塔文化とは別のジャンルに属する。石塔と景勝地との関係性から、第二部に配置したのであろうが、付編か別章に別立てした方が分かり易い。

③「霊所七瀬祓い」の場所と大型石塔の分布範囲は余り一致していない。「七瀬祓い」は、都市鎌倉の境界と言うよりは、悪霊・ケガレ送りの場で、精神的・宗教的な結界と理解すべきである。

④石造物文化と葬法の伝播の関係、僧侶間の師弟・交流関係などの要点は、模式図化して示した方が理解し易くなる。

⑤石塔が本来は仏舎利容器であるとの見解の根拠の提示が不十分である。中国では高僧の遺骨は仏舎利と同じと見なされた点を、中国仏教史の研究論文から引用しているが、日本での仏舎利信仰に関する論文と研究史が引用されていない。

⑥分骨と骨堂の習俗と遺跡の事例分析がなされていない。

鎌倉に限定したために、建長寺・北条得宗家との関係が深い、宮城県松島の円福寺跡（瑞巌寺）の「やぐら」文化と葬法、分骨習俗への言及と比較研究が不十分である。

⑦建長寺開山の蘭渓道隆の一周忌の１２７９年に造立された開山塔とほぼ同時期の１２７３年に造営された、琉球王国の英祖王の墓所である、沖縄県浦添市の「浦添ようどれ」との比較検討がなされていない。

「ようどれ」は浦添の港と町を見下ろす浦添城（グスク）の琉球石灰岩の崖面を横掘りして石室を設けており、構造的に「やぐら」と類似している。石室内に木造の廟屋を造り、屋内に中国風の浮き彫りを施した中国産石材の石棺を置き、その中に遺骨を納めた朱色の琉球漆器の唐櫃を安置していた。英祖王統の宗旨は臨済宗であり、「ようどれ」の直下に京都から招来した伝える臨済宗の極楽寺があった。

「浦添ようどれ」は、中国式葬法の直輸入であり、臨済宗の関与があった。中国式葬法と臨済宗の影

響下で成立したと結論付けた、鎌倉の「やぐら」との比較研究が必要である。

〔合否の判定〕

鎌倉に招来された中国臨済宗の純粋禅と日本の北京律、南都律とが融合して、中世都市鎌倉で豊かで多様な石造物文化が隆盛したことを論証した。石塔と「やぐら」を中心とする鎌倉の石造物文化を、石塔類の緻密な分析と編年の考古学的な研究、中国の仏塔・葬法の事例との比較研究、中国禅僧と京都の北京律僧、鎌倉の禅律僧との濃密な交流と人間関係の考究などから、「やぐら」と「地下式坑」が中国の仏塔の地下施設に由来することを解明した。考古学研究と仏教史研究を総合する困難な課題に挑んだ、意欲的な論文であり、審査員一同から高い評価が与えられた。

〔審査結果〕

本論文は、博士（文化財学）の学位を授与することに相当すると認められる。